

子どもを信じるということ

カッターを使っている友だちの様子をじっと見ていた子が、「私もやってみたい」と言ってきたので、任せてみようと思った…刃の向きや切り方の方向を試行錯誤し、時々、思わず「あっ！！」と、声を出しそうな場面に出くわしたが、最後には自分の力で切り方を見つけ、無事に切ることができたと、教えてくれた3歳以上児のクラス担任。

そして、「こどもって、スゴイですよ。ちゃんと力があるんだなあ。(中略)この保育(子ども主体的な)に変えてから、子どもをどこまで信じているのか自分が毎回、問われています」と、言ってきたことがとても印象深い。

この頃、職員からよく聞く言葉。『子どもの力を信じる』

●たなに登りたい



1歳になると、棚や柵・テーブルに足を掛け、登ろうとする姿がみられます。

今年のいちご組(1歳)も進級すると左の写真のような姿をよく見かけるようになりました。

今までだったら、頭から落ちたら危ないので、そんな姿を見かけたら慌てて「あぶないから登らないで下さい」と言って、登っても良い環境を用意しながら、危険という理由で大人がすぐに抱きかかえ、降ろしてきました。



けれども、こどもをよくみていくと、登った理由がそれぞれ見えてくるようになりました。

「足が浮く感覚って不思議なのかな?」「お腹を軸にしてゆらゆらする感覚を楽しめるのは成長の証?」「子ども自身、棚に登ってはいけないってことは、分かっている?けど、体が動きたいって欲しているの?」

「子どもが気持ちを切り替える時間を保障すると、自分から降りる?」

大人が勝手に降ろしてしまうことは、揺れる感覚・体育で・気持ちの切り替えのチャンスを奪っていたのかも知れないと思うようになりました。自分で降りるまでの時間を保障し、同時に揺れたり登ったりする環境も用意していくと、子ども達は段差の上り下りが安定し、ジャンプの名人になっていました。もちろん、棚の上に登ることは、してはいけないという事も同時に伝えつつ…。

●水ってなあに？！

ホールであそぶと、決まって手洗い場の縁につかまり立ちをして、つたい歩きをし、最後には、水の出ぬ蛇口に手の平を押しつけ、たまっていた水が手の平につく事を楽しんでいたどんぐり組（0歳）。ところが、とうとう栓を開けられるようになり、床が水浸しになってしまったことから、テラスの手洗い場であそぶようになりました。



テラスの手洗い場は高さがあり、自分で蛇口の栓は開けられませんが、水を出してあげると背伸びをしながら、流れでる水に手を差し伸べ、容器にため、口に持っていったり、流したり・・・と、日に日に水に魅了されていく様子が子ども達の表情で分かりました。そして、手洗い場だけではおさまらず。

シャワーコーナーへの探検が始まりました。

はじめは、ホースへの興味？それともタイルの足の裏の感触？段差の上り下りが楽しい？と、思っていました。手洗い場での水遊びに満足をする、シャワーコーナーへ降りていくという、おきまりコースが日課になりました。

そんなある日、「ちょっと、ごめんね」と言って、庭にいた職員が水を汲みにきました。

その様子をじっとみていたSちゃん。

その後、見て学んだ栓のひねり方に挑戦です。両手で試行錯誤し、やっと栓を開けたと思ったとたん、なんと勢いよく水が流れ出てきて、びっくり！！けれども、ここでは、終わらず、手の平・唇・舌・首・・・体のあちこちに流水を当て、水圧を感じ、流れる水に耳元を近づけ、音を聞いているかのようにじっと座って集中。

『水がもったいない』という思いから、中途半端に水を使わせ、大人の都合で終わりにするより、保育（学び）の大切な教材と思い、子どものしたいことを信じ、とことんさせること、五感で感じることで、心動くことになり、いつしかその体験が、『水は大切』であるということへとつながるのではないかと。

そのためには、まずは、水のことをとことん知らないよね。



●色の魅力に魅せられて



昨年度から、少しずつ色への興味が出ていましたが、あんず組（2歳）になって、遊びの場面で左のように玩具を色分けしてあそぶ姿が多く見られるようになりました。

それは、誕生日にお家で食べたイチゴケーキのいちごが真っ赤だったことから、『赤色』への魅力が増したFちゃんの影響があったようでした。そして、色への関心は、他の子にも少しずつ伝播していきました。

「〇〇ちゃんは、黄色ね」「△ちゃんは、青ね」と、子ども達の中に、ひとりひとりのイメージカラーができ、それが面白いことに、子ども達の共有カラーになっていきました。

そんな時に、園庭に絵の具を用意してみると…。

赤オンリーだった子が、他の色に魅了されたり、色より絵の具の感触の気持ちよさに気づいたり、反対に色に関心のなかった子が混色遊びにはまったり…。

子ども達は、色をきっかけに五感を通して様々な事に関心や興味が広がっていているところです。どこへ向かうかは子ども達次第。子ども達の探求を一緒に楽しみたいと思います。



こうして子どもたちの姿を見ていると、職員同士感じたことを話していくと、また違った子どもの姿に気づくことがあります。保育（育児）に正解なんてないのかもしれない。

だからこそ多面的に子どもを見て行くことを大切にしたいと思っています。

そうやって、常に問い続けることが大切で、子どもの本当の姿を見ようとし、子どもを信じ、子どもと同じように保育者も探求していく……。

そして保護者のみなさんと一緒に喜び会えることを大切にしたいなあと思っています。